



TITLE:

静脩 Vol. 25 No. 4 (1989.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 25 No. 4 (1989.3) [全文]. 静脩 1989, 25(4)

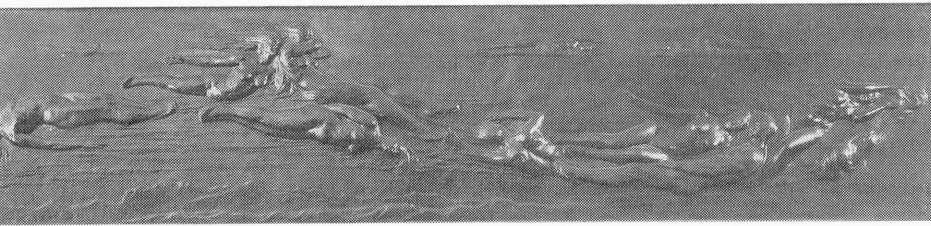
ISSUE DATE:

1989-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65994>

RIGHT:



静脩

1989年 3 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25. No. 4

図書検索とCD-ROM

大型計算機センター教授 星 野 聰

昨年の秋のことである。私は「狩猟」のことを知りたくなった。というのは、夏期に狩りをする一行のことを記した日本古代史の史料があって、私にはその記事が疑わしく思えたからである。ところが、私には狩猟の知識が全くないし、勿論ハンティングの経験もない。そこで、本屋に行ってみた。しかし、一般の書店にはペットの飼いの綺麗な本は並んでいても、動物を殺す技術を扱ったものは、昨今では容易に見当たらない。考えてみれば、今や大多数の日本人にとって、狩りは身近かなものでなくなってしまったのである。

そのうちに東京に行くことがあって、神田の古本屋で赤尾好夫著「狩猟・ハンターガイド」(昭和33年刊 ダヴィッド社)を見つけて入手した。旺文社社長と全日本狩猟倶楽部の会長で、かつハンターであった著者は、その中で「狩猟は秋から冬に限られている。これは鳥類の繁殖期たる春から夏をさげ、秋から冬の農林業への被害の少ない(原文:多い)時季を選定したものであろうが、実際問題としても、夏の狩猟などはナンセンスである。酷暑にあえぎ獲物は捕った後から後から腐敗してしまう。とても狩猟どころではない。」と述べられている。これは、ハンターとしての経験

による言葉で、単に文献を纏めたような書物から得られない実感をもっている。私は、夏の狩りをますます疑わしく思うようになり、もっと狩りのことを知りたいと思った。

さて、国立国会図書館の蔵書の目録、つまり書誌情報がCD-ROM^(注)に格納されて、J-BISC^(注)と言う名前で、日本図書館協会から発売されている。ただ残念なことに、これには過去の10年分程度しか収められていない。このCD-ROMは、すでに各地の図書館などで利用されているが、我々のところでも、PC-9800シリーズのパソコンに、このJ-BISCをつけている。そこでまず、書名に「狩猟」か「狩り」を含んでいるものを探してみたところ、14件の書物が見つかった。

ところが、狩猟を扱っている本でも、題名には「狩猟」や「狩り」の語が入っていないことが多いのである。このことは、別に狩猟に限った現象ではない。

では、もっとある筈の狩猟関係の本をどうして探せばよいのか?

幸いなことに、国会図書館では一般件名と呼ばれるキーワード(国会図書館件名標目表にある)が書誌情報に付加されていて、これがJ-BISCに

も収められている。そこで、「狩猟」か「鷹狩」という件名をもっている書籍を探してみると、実に74件も見つかるのである。これらの書物は題名からだけでは調べるが大変であり、また困難なこともある。この中には、「放鷹」（宮内庁式部職編、吉川弘文館、昭和6年の復刊）や「御鷹場」（本間清利著）などが含まれている。鷹狩の語はこれらの書物の題名にないから、何らかの手掛かりがないと探すのが大変である。また、探索した中に「綱差役川井家文書」というものがあつたが、この綱差役は鷹場役人を指すものらしい。これを知っていないと、この文書が鷹狩と結びつかない。だから、上で困難なこともあると言つたのである。

このように、J-BISCを活用して、件名を使うと各書物が扱っている主題を手掛かりにして、能率よく書物を探することができる。しかし、この件名は普通一つしかつけられていない。しかも書物の種類によって、例えば「狩猟免許試験例題集」のようなものには、件名が全くつけられていないこともある。これは科学技術文献情報のデータベースと違っている点である。

狩猟に就いてより完全に調べるには、図書分類を手掛かりにしなければならない。図書館や書店では、書物を主題順に書棚に配置していることが多いが、図書分類は、この配置に利用されている。ただし、狩猟関係の書物は、遊猟、鳥類、農林・水産などのいくつかの分類にまたがっているので、探す労力は大きくなる。（件名と分類との対応は国立国会図書館件名標目表にある。）

探索された書物の中で、学術的な感じがするのは大学図書館にもあることが多い。しかし、例えば大日本猟友会刊「近代日本狩猟図書館 全13巻」や堀内讃位著「日本伝統狩猟法：写真記録」、ひいてはハンター向けの雑誌、法規、統計関係などは、大学図書館にあまりないようである。

私は、J-BISCで検索した本のうちの若干を、国会図書館で閲覧したのであるが、「近代日本狩猟図書館」というのは、多くの古書の複製から成っていて、歴史の古い図書館では個々の書物を見出せるものもあろう。その内容は昔のハンター自身の著作など、とても興味深いものである。また、

堀内讃位著の本は、過去の貴重なハンティングの多数の写真を収めている。ハンター向けの雑誌とは「狩猟界」、法規は「動物六法」、統計は「鳥類関係統計」の類である。

内容としては、ホビーに属するものも多いが、それでも大学図書館になくてよいものであろうか？

と言うのは、自然と結びついた、活きた知識を得ることが出来るからである。特に、人文科学の研究では、このような知識が必要だと思うからである。

関西には、広い分野に互って書物を本格的に収集・整備している図書館が少ないから、これらを見るには、国会図書館で閲覧するのが能率的であろう。私の経験では、国会図書館で過去のほぼ10年以内に刊行された図書を調べるときは、ぜひJ-BISCで検索した結果、つまり書誌情報をプリントして行かれることをお勧めしたい。目録類を引く手間が省けるので、大変能率的である。そして、限られた開館時間を有効に利用して、書籍を調べられるからである。

なお、J-BISCは、なにも国会図書館を利用するときだけに役立つのでないことは、上に述べたことから理解されるであろう。例えば、大学図書館を利用する際にも、J-BISCを活用すれば便利な筈である。

ところが、調べてみたいテーマを扱っている本のリストがあるとき、一体どの本が良いのか、あるいは検索した以外に、もっと読むべき本が漏れていないかを知るのは難しい。これはもはや技術の問題ではない。書物を探すのはもちろん本人の責任であるが、その手助けの役は、本来ライブラリアンに期待されているのである。

〔編集部注〕

・CD-ROM : Compact Disc Read Only Memory
・J-BISC : Japan Biblio-diSC

防災科学資料センターについて

防災研究所 助教授
防災科学資料センター

松 村 一 男

自然災害科学の研究においては、観測調査の資料および災害関係資料の活用が極めて重要であり、そのような基礎資料を収集、整備し、研究者が有効に利用できるようにすることが必要である。さらにそれらの資料を解析し、異常自然現象の極値やその予知、防災や減災の基準、災害状況の予測、防災施設の破壊限界など自然災害科学の基礎的問題を解明していく必要がある。このため、災害科学関係資料の収集、整備、活用ならびに解析を行うとともに、異なる専門分野の研究者の協同研究の場としての災害科学資料センターの設立が要望されてきた。昭和42年日本学術会議が勧告した「自然災害科学研究の拡充強化」に示されている全国6地区災害科学資料センター構想に沿うべく資料センターの設置を要求していたが、昭和47年度にその一部が認められ、本防災科学資料センターが発足した。

本防災科学資料センターで収集されている資料は、過去の災害に関連した資料と災害の調査・研究に必要な基礎データに大別される。過去の災害に関連した資料としては、報告書や論文集といった文献の態をなすもの以外に、災害場所における調査聞き取り記録、災害写真、災害分布図、新聞記事、マイクロフィルム等種々の形態のものが含まれている。災害調査・研究の基礎データとしては、各種気象資料、地形地質図、空中写真等が挙げられる。

収集された資料が有効に利用されるためには、それらを分類整備する必要があるが、種々の形態の資料が含まれるため、一般の図書の分類法では対応できない。そのため自然災害独自の分類コードを策定し、それに基づき資料を分類整理してきた。そして、毎年「関西地区災害科学研究資料文献・資料目録」を刊行し、全国の災害科学に関係する研究者の利用の便を図ってきた。

しかし、収集された資料の増加に伴い、上記の

「目録」だけでは、その検索に時間と労力を要し、資料の有効利用を図れなくなってきた。また災害の様相が複雑化し、1つの分類コードで資料を特定できない場合も増えてきた。そのため昭和47年度に資料の2次情報に関する文献資料情報データベース“SAIGAICS”を京都大学大型計算機センターに構築し、種々の項目で検索をすることによって必要な資料の入手が簡単になるようにした。また、自然災害独自のキーワードを収めた「自然災害キーワード集」を作成し、検索効率の向上を図っている。現在、このデータベースには、約11,000件の資料が登録されている。



資料複写閲覧室に設置され空中写真図化装置

収納される資料は、種々の形態のものが含まれるため、単にキーワード等の検索項目を設定し、データベースに登録するだけでは、利用に際して不便なものも含まれる。そういった資料は利用効率を考慮し再編成する必要がある。災害研究の基礎データとして保存されている空中写真がその一例である。空中写真は一般に撮影コースごとにファイルされ、撮影コース名で資料の検索が行われてきた。しかし、撮影コース名で必要とする場所の空中写真を見つけるには、撮影コースに関する情報や、空中写真標定図が必要になってくる。ま

た、撮影コースごとのファイルでは、必要とする場所のファイルが多くなり、空中写真の抽出が煩雑になってくる。このため、空中写真を5万分の1の地形図ごとのファイルに再構成し、検索、利用が簡単になるようにした。再構成された空中写真は、中部地方西部、近畿、中国および四国地方をカバーし、約40,000枚、550ファイルである。

災害調査にともなう各種の被災写真も多数保存されているが、これらはフォーマットのきまった台紙に貼付し、必要項目を記入し保存すると同時に、データベースに登録している。

上記の空中写真の図化作業やマイクロフィルム、マイクロフィッシュの読み取り、複写作業を行う各種装置が資料複写閲覧室に備えられており、資料の利用の便をはかっている。

自然災害に関連する資料は非常に広範な学問分野にわたり、膨大な量にのぼるため、それらをすべて収集することは至難の技である。資料の収集・保存はそれ自体、非常に重要なことであるが、収集に一種の思想を持たせないと、単なる倉庫になりかねない。特定の災害に関連する重要な資料はすべて保存しているといったことも重要なことであり、防災研究所では、特定の災害についてはプロジェクトチームをつくり集中的に資料の収集を行うことにしている。この作業は、まだ始まったばかりなので対象とする災害は多くはないが、今後この作業を継続し、対象災害を増やすことによって、全国の災害科学研究者にとって非常に有用な資料となることが期待される。

本防災科学資料センターでは、資料に重点を置くということで、論文については収集の対象としてこなかった。しかし、文献資料情報データベース“SAIGAIX”が構築され利用されるようになると、資料だけでなく関係論文に関する情報も、データベースに収納する方が利用者にとって有用である。ただ、広範な学問分野にわたる自然災害科学に関連する論文をすべて網羅することは大変な労力を要するので、論文を限定して収集し、データベースに入力することになっている。現在、防災研究所年報Aの発表論文要旨集に掲載されている論文の別刷りを収集し、データベースに入力す

ることにし、昭和47年以降の論文、約3,400件についてはその作業を終えている。また、いくつかの自然災害科学関連の論文集についても、データの入力作業を開始している。

本防災科学資料センターでは資料を収集・保管すると同時に、資料解析に基づく自然災害の研究を行っている。資料室に保存されている上記資料の他に、これらの研究の基礎データとして、気象庁で作成された AMe DAS やひまわり等の気象データ、ISC (International Seismological Center) や気象庁で作成された地震資料、国土地理院で作成された地形関係を主とした国土数値情報が磁気テープの形で計算機室に保存されている。これらのデータは、FACOM M-340R を用いて、自然災害に広く利用されている。また、自然災害に関する研究に関連する実験・観測データも多数保管されているが、現在は個人ファイルの域を出ず、一般には公開されていない。これらの数値データを共同で利用できるデータベースとして構築するための研究が行われている。

文献資料情報データベースの構築については本防災科学資料センターだけでなく全国的にも取組まれており、各古屋大学の災害科学資料センターでは FAIRS のもとで、同様のデータベース“SAIGICH”を構築し、10,000件弱の資料を収納している。また、九州大学災害科学資料センターでも、データベースの構築を準備中である。また、個々の地区だけでなく、全国的な文献資料情報データベースを構築しようという気運は高まっており、本資料センターを中核とした全国的な文献資料情報データベース“SAIGAI”の構築の計画が進められている。



《主題別研究集会》

出版物の新しい形態と大学図書館

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の主題別研究集会が標記テーマで昨年12月2日、大阪大学基礎工学部のシグマホールで行われた。

講師は愛知淑徳大学教授・津田良成氏、12大学から43名の参加者があった。

話は、情報技術の進歩（特にコンピュータとテレコミュニケーション）が飛躍的に進んできたときに大学図書館はどのようなになるのか、という視点で進められた。

現在、日本の大学図書館がかかえている問題として件名目録の不備のほか、目的意識をもったマネジメント指向、Technologyの導入、利用者の分析にもとづいたサービス内容を検討していく事等の不足が指摘された。

Information Technologyの応用範囲は、図書館の日常的な仕事（House keeping）をコンピュータ化し、資料・情報面では二次資料のコンピュータ化（Data Base化、情報検索）、Non-book materials、特にAV（視聴覚）資料の普及、印刷物の電送化、図書館のStudy roomにNew mediaの集中をもたらし、そこでonline検索、電子メール等がつかえるようになり、さらに電子出版が実現しようとしている。

出版物の新しい形態としての電子出版（electronic publishing）は、図書館の形を変えて行くものといわれている。技術の進歩は図書館のサービスに大きなインパクトを与えてきている。

電子出版が今後の図書館にどういった影響を与えるかの予測を立てることが必要となり、図書館を新築する際の留意点ともなる。

電子出版には集中方式と分散方式があり、媒体にも全く電子的なものだけで行う場合と印刷物と併用して用いる場合とがある。どの形が将来主流になるのかによって、図書館の形も変わってくる。当分は併用の形が主流になるだろう。

電子出版の利用は、VDU（Visual Display Unit）

を通して読むため、“流し見”ができないこと、約40分以上は続けて見られない等の問題をもっている。反面、その利点としては多くのものをもっている。例えば、出版が速い、内容がup to date、interaction、即ち、利用者のコメントを付け加えたりすることが出来易い、広い範囲の出版物にアクセスできる、集めた情報の並べ換えが容易、教育用プログラムが作り易い、増加する情報検索の蓄積に良い。図書館スペースの節約、著者と研究者の間に直接のコミュニケーションができ、これによって中間的な機関が必須でなくなる可能性、検索に適しており、また個々の人の条件に合わせたプロダクトができ、費用節減等々である。これらのことから、電子出版の普及は、研究者、出版者、さらには発展途上国にもさまざまな面で大きな影響を及ぼすこととなるだろう。

人文・社会科学は今の形の資料で残り、自然科学系の資料は電子出版に取って変わるのではないかと予測もできる。

これらのことから、図書館への影響は、電子的な将来の世界を予測しながら、直前の緊急な問題の解決を延ばして行くことは不可避である。どれくらいのスピードでどの分野が電子化されるのか見極めねばならない。今後、益々情報のoverloadになるといわれるが、そうすると不要情報の切



イラスト：森 雅子(教養部)

り捨て、必要情報の収集と中身を濃縮して提供することが要求される。図書館員には物の管理者から情報の中へ入り主題に対する知識が要求され、利用者に対するアドバイス、利用者教育がますます重要となる。

英国での調査の結果いわれていることは、短期またはある程度の先まではフルテキストの電子化への転換はないだろう。将来の状況では、図書や雑誌は図書館におかれ、従来の方法で利用されて

いくだろう。図書館に次の目玉商品であるレーザーカードがもっと使われるようになるだろうが、近い将来に伝統的な資料にとって変わることはないであろう。OPAC (Online Public Access Catalog) が全国どこからでもアクセスできることが望ましい。さらに図書館のコンピュータが大学内の他のコンピュータと互換性を持ち、ネットワークを通じて電子メールなどが使えるようになる、ということがいわれている。

《地域ネットワーク》

奈良教育大学図書館、 京大・学術情報センターと接続

昭和63年度、奈良教育大学附属図書館に電子計算機システム導入の予算が認められ、2月1日、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク（センターは本学図書館）並びに全国の学術情報ネットワークへの接続を記念して、同大学に於いて、開通式が行われた。

式には、同大学、近畿北部地区国立大学図書館、電子計算機メーカーから合わせて51名が出席し、藤永学長および市川図書館長の挨拶、本学図書館の砂本部長および電子計算機メーカーからの祝辞のあと、システムの説明とデモンストレーションに移った。市川館長のスイッチオンにより、ディスプレイ端末に上記ネットワークへの開通のメッセージと、奈良の観光名物である鹿の絵が表示され、その後、学術情報センターと本学図書館の電子計算機システムを利用した目録検索が披露された。

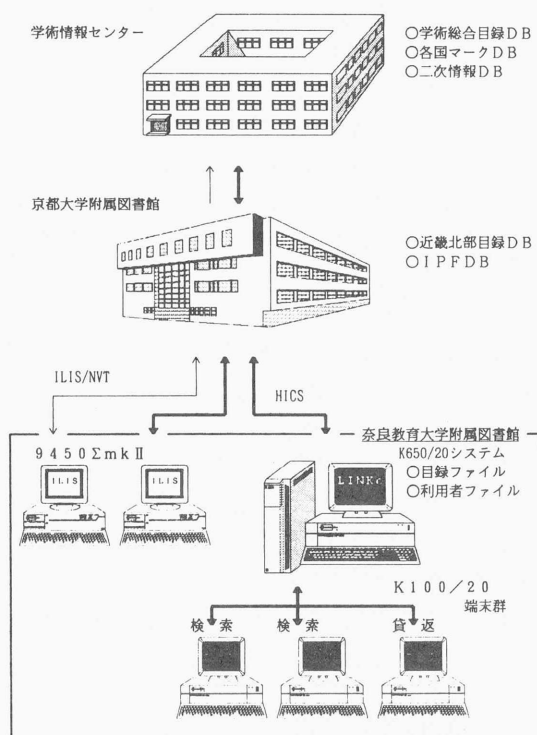
学術情報システムは全国の大学の参加の下に学術情報センターを中心に、大学の大型計算機センター（情報処理センター）、図書館、国立大学共同利用機関等をコンピュータと学術情報データ通信網で結合し、大学等の研究者が必要とする学術情報を迅速・適確に提供する、全国的・総合的な情報流通システムである。

この計画を達成するため、近畿北部地区（滋賀・京都・奈良）七大学図書館においても昭和56年に

は図書館間で組織を作り、地域ネットワークの構築を目指して活動を行ってきた。

同大学のシステム導入により、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク参加館は、本学を除き四大学（京都工芸繊維大学、滋賀医科大学、滋賀大学、奈良教育大学）となり、残る二大学（京都教育大学、奈良女子大学）も近い将来参加する予定である。

ネットワーク構成概念図



提供：奈良教育大学附属図書館

《研究集会》

大学図書館のネットワーク 形成をめざして

——情報検索と新しいサービスの在り方を求めて——

昨年11月24日と25日の2日間、日本図書館協会大学図書館部会及び国公立大学図書館協力委員会の主催により、「第9回大学図書館研究集会」が標記のテーマで行われた。会場は東京都町田市にある法政大学多摩キャンパス百周年記念館で、全国の大学から200名の参加者の下に熱心な討議が行われた。

全体会議で東京大学の倉橋部長による“国際化時代における大学図書館”という基調講演の後、分科会討議に入った。

第1分科会：ネットワークの形成

—相互協力を視点として—

コーディネーターから、外国雑誌の分担収集と相互利用（外国雑誌センターの活動）、オンライン国際図書館ネットワーク、東京西地区大学図書

館相互協力連絡会について報告があり、大学図書館の相互協力とネットワークの形成について討議を行った。

第2分科会：情報検索と利用者サービス

中規模図書館での機械化の現状と課題、大規模図書館のトータルシステム、特に多種多様化しているデータベース利用の現状と今後の利用拡大への問題点、及びデータベース提供機関（JICST 日本科学技術情報センター）から、今後の動向について報告された。これらを受けて、データベース利用上の問題に集中して質問・討議がなされた。

第3分科会：学術情報センターと学術情報の構築 をめぐって

国立大学と私立大学の接続館から事例報告及び学術情報センターから同センターのNACSIS-CATを中心とした現状と今後についての報告がなされた。討議を通じて、ネットワークの形成と学術情報システムの構築状況について理解を深めることができた。

『雲』（標題写真）を改版

「静脩」の創刊、昭和39（1964）年以来、標題横を飾っている斎藤素敏の「雲」の版を今回改めました。創刊以来使っていた写真版が長期の印刷で摩耗してきたため、今回、撮影し、装いを新たにしましたものです。

このレリーフは図書館1階と本部事務局正面玄関に飾ってあり、2階ロビーにある西園寺公望による額「静脩館」とともに京都大学と図書館の歴史を長い間見つめ続けてきたものです。

「雲」（はじめは「空」といわれていた）の由来については、元教育学部長・名誉教授の鯉坂二夫先生が「静脩」誌上で述べておられます。少し長くなりますが引用します。

「『雲』が作られたのは、大正13年、軍閥はなやかな時であった。この男女の裸体の浮き彫りが問題になったのは当然である。それのもつ芸術的な価値や、品格というようなものが、それにふさわしく評価されないばかりか、かたく

々な旧来のものの考え方、見方は、やがて美の世界への圧力となって、この『雲』の上にも不当な嵐を呼び起こす気配さえもあらわれ、これを芸術品として、その嵐から守ろうという識見の人のないままに『雲』の行方はあやぶまれた。

その時である。京大総長荒木寅三郎先生は敢然としてその『雲』を京大に引き上げ、それを正面玄関に高くかけられたのであった。以来『雲』は京都大学のあゆみとともにある。学問の真理と研究の自由を背骨とする大学は、また、美の擁護者でもあったのである。」（「静脩」1（2）、1964. 11）

西島総長も昭和62年度学部入学式で、この作品と京都大学とのかかわりについて詳しく述べておられます。（「京大広報」No. 330, 1987. 4. 15）

資料紹介

世界諸地域・諸民族の文化を調べる…

HRAF 資料について

附属図書館3階特殊資料室に入って右側にスチール製キャビネットが多数並んだ一角があります。

これが、HRAF (フラフ) (Human Relations Area Files) と呼ばれているものです。

附属図書館における HRAF の歴史は、1962年5月、本学が HRAF の正式メンバーに選ばれ、アメリカのエール大学におかれている HRAF 本部から膨大な資料が送られて来たことに始まります。

HRAF は「人間の文化や社会を研究するあらゆる科学にたいし、資料収集と研究成果公開の便宜を図ること」を目的とし、比較文化の観点から、世界の諸民族・諸地域の社会を対象に実証的な研究業績を集め、それらを HRAF 独自の手法で体系的に整理した資料群です。

資料は主に現地調査をしてまとめられた単行本・雑誌等から優れた研究業績の各頁を写真に撮り、1枚ずつのスリップ (20.5×12.5cm) にしてバラされています。膨大なスリップ (約350万枚のハードプリントと1985年以降はマイクロフィッシュ) はエール大学のマードック教授 (G. P. Murdock) の指導によって作成された HRAF 独自の分類表によって配列されていることが大きな特徴です。

第一の分類表は、OWC (Outline of World Culture) で世界を大きく8地区に分け、更にすべての民族や地域社会が番号別に分けられています。

第二の分類表は、OCM (Outline of Cultural Materials) で、世界共通の人間行動に関する分類表として考えられ、あらゆる文化やその背景となる情報を2桁の数字で分け、更に1から9までの数字を加えた637の小区分に分けられています。

<例> 58 婚姻

- 581 婚姻の基礎
- 582 婚姻規制
- 583 婚姻の様式
- 584 婚姻成立までの諸習慣
- 585 婚姻儀礼

- 586 婚姻の解消
- 587 再婚
- 588 変則的結婚関係
- 589 独身

各1枚のスリップには、①原典資料 (ソース) 番号、②著者名、③著者の専攻、④資料評価、⑤現地調査年次、⑥出版年次、⑦ソースの地域分類、⑧社会名、⑨カードの地域分類、⑩事項別分類 (複数) が付されています。

HRAF は、人類学、民族学、社会学等の比較研究や分布研究を行うにあたり、有力な手段となることでしょう。一見、冷たい感じを与えるスチールキャビネットのなかから、人間社会の諸側面が浮かび上がってくることでしょう。

スペースの関係で内容を相当割愛しました。より詳しい内容は、下記のマニュアルや参考資料をご覧ください。

- ・ Outline of World Cultures (OWC)
 - ・ Outline of Cultural Materials (OCM)
 - ・ HRAF Source Bibliography : Cumulative
- 現在ファイルされているすべての図書、記事、原稿のリスト。OWCコード順にリストされている。地名索引、著者名索引付。
- ・ Index to the HRAF Files
- ある特定の事項に関する記事が、どの資料の何頁に載っているかを示す OCM 事項別索引。
- ・ Nature and use of the HRAF Files : A Research and Teaching Guide
- HRAF の性格と使用法について例を用いながら説明したガイドブック
- ・ Sixty Cultures: A Guide to the HRAF Probability Sample Files
 - ・ A Guide to Social Theory: Worldwide Cross - Cultural Tests
 - ・ HRAF Holographic Computer Program Library (HRAFLIB) (木村伸夫)